

## 價值單位の研究 (二)

岩 井 茂

二十世紀に於いて貨幣論上に齎らされた重要な諸の貢獻の中の一に、貨幣の中に於いて價值單位が一個獨立の存在を興へられるに至つたことのあるのは何人も之を承認するところであらう。併し從來この價值單位の理論的研究は充分であつたとはいへない。クナップは價值單位の歴史性、名目性を力説したが、價值單位そのもの、研究を盡してゐない。(一) ベンテイクセンは價值單位を貨幣記號と共に貨幣存立の二前提となしたが、又特に價值單位が諸價值の共通分母たることを明かにし、終に「共通分母としての貨幣」を説くに至つた。(三) 更にエルスタアは社會的主産物に對する參加可能性と之に對する參加測度と又之に對する參加手段とを共に貨幣と認めてゐる。そして參加手段は所謂支拂手段であり、參加測度は所謂價值單位なのであるから彼にあつては價值單位は又貨幣なのである。(四)

更に此の系統とは別個の研究道程をたどつて、ライフマンは貨幣は抽象的計算單位なりと結論して、以つて價值單位の中に貨幣の姿を認めてゐる。(五) 之等何れの著者についても價值單位の重要性は大いに認められてゐるが價值單位と支拂手段又は交換手段との關係及び價值單位それ自身の性質に就いては未だその鑿穿の手は深く至つて

るない。併し今日貨幣論が渾沌としてその歸趣を知らざる状態を呈してゐるが、それは一面確かにこの價值單位の研究の不充分なことに基因してゐる様に私には考へられる。依つてこの方面への考察は特に私の注意を誘發するのである。

扱て斯くの如き事情の許にあつて最近私の眼にふれた一文がある、それは經濟學及統計年表に掲げられたゾムマアの「貨幣と價值單位の現象形態」と題する論文である。<sup>(六)</sup>私は以下に於いて此の論文の要旨を紹介したいと思ふ。

- (一) Vgl. Knapp, Fr.: Staatliche Theorie des Geldes. 3. Aufl. 1921. S. 9. 邦譯 宮田喜代藏「貨幣國定學說」二三頁以下
- (二) Vgl. Bendixen, Fr.: Wesen des Geldes. 3. Aufl. 1922. S. 25ff.
- (三) Vgl. Bendixen, Fr.: Geld und Kapital. 2. Aufl. 1920. 25ff.  
右拙譯「共通分母としての貨幣に就いて」商工經濟研究第三卷第一號
- (四) Vgl. Elster, K.: Seele des Geldes. 2. Aufl. 1923. S. 25ff. 邦譯 入澤民政「貨幣原論」三九頁以下
- (五) Vgl. Liefmann, Grundsätze der Volkswirtschaftslehre, II. Bd. 2. H. 1922. S. 120ff.
- (六) Sommer, Albrecht.: „Das Geld und Erscheinungsformen der Wertinheit.“ in „Jahrbucher für Nationalökonomie und Statistik“ 130. Bd. III. Folge. 75. Bd. Heft. 1. Januar. 1929.

## 一 貨幣と價值單位

### a 貨幣の價值測定職能

元來貨幣職能論は貨幣の有する意味を理解せんとの熱望の現はれである。そこで職能論は貨幣が如何なる目的の爲に存するものであるかといふ問に答へ、更に之によつて貨幣現象の「本質」を明かにしようとするのである。

この職能論は金屬主義的貨幣觀に傾いてゐるものではあるが、名目主義でも少くとも一つの貨幣職能を是認しなければ存立し得ないのである。何故かといへば凡そある一つの制度が何の爲めに存するかといふとき、それ自身の爲めに存するものだと説くのは、矛盾をなすからである。貨幣がなす職能が幾つあるかゞ問題となるとき、貨幣職能問題が起つて來るのである。從來種々の異つた意見が出てこの問題は未だ満足な解決を見てゐない。

どの貨幣にも總べての職能が備はつてゐるといふのではないから、貨幣職能の數は幾つと根本的にきめることはできない。併し大體次の如きものを擧げることができる。(Wagemann: Allgemeine Geldlehre, I, 1923, S. 100.)

- 一 一般的交換手段
- 二 一般的、特に法律的支拂手段
- 三 一般的價值及び價格の測定
- 四 價值保存手段
- 五 價值移轉手段
- 六 財産表示手段
- 七 資本流通の媒介

大體以上七つの職能が擧げられるのであるが、その中初めの三つが主要職能で他は此の主要職能から誘致された派生的職能である。そこで問題は、どうして貨幣が之等三つの職能を果たすかといふことになる。此の問題に答へる爲めには先づ貨幣概念そのものを考究して見る必要がある。

貨幣に就いては多くの人が色々に考へてゐるが、茲に二三擧げてみると、コンラッド (Conrad: Grundriss zum Studium der politischen Oekonomie, I. Teil, 5. Aufl., S. 69.) は「物を財なりとし、マネー (Allgemeine Geldlehre, S. 95.) は價值單位の保持者なりとし、マズナー (Wagner: Ad. Sozialökonomische Theorie des Geldes und Geldwesens 1909 S. 121.) やクルンハッツ (Helfferich, K. Das Geld, 2. A. S. 220.) やフィリップovich (Philippovich: Grundriss der politischen Oekonomie, I. 18. Aufl., S. 270.) は「物を物體 (Objekt) なりとしてゐる。又オツペンハイム (Oppenbeim, Samuel: Die Natur des Geldes, 1855, S. 3.) は「物を物體 (Sache) とし、ヘル (Heller: Theoretische Volkswirtschaftslehre, 1927, S. 103.) は「貨幣は交換財の純粹なる範疇である」と論じてゐる。更にイディー (Edie, L. D.: Economics, 1926, S. 493.) は次の様に云つてゐる。即ち「貨幣とは或社會に於いて、それ以外の總べての財や勤勞と交換するとき一般に受領され得るところのあるもので (anything) ある」と。

之等の諸説を見るに何れも貨幣を、流通場裡に於いて交換手段や支拂手段たるの職能を盡す、具體的なものと考へ、鑄貨を以つてその典型的なものとなしてゐるようである。ところが價值測定職能は之と趣を異にしてゐる。もと／＼貨幣の價值測定職能といふときには、そこに多少の誤解が潜んでゐる。第一價值は精密に測定する

ことはできない。之は質的な現象であつて、只程度の差を付けることができるだけである。次に又連続的な価値現象を断ち切つた場合にのみ、之を貨幣で云ひ表はすことができるのであつて、之を価値の測定といふわけにはいかなない。そこで限界效用論者達は貨幣が使用価値を測定するものでないことを力説してゐる。けれどもそれをいくら力説しても積極的に価値測定職能が何を意味してゐるかを明かにすることはできぬ。寧ろこの価値測定職能を論ずるに當り大切なことは、価値決定や價格決定の行程に參與するのは、具體的な貨幣ではなくして、之とは別の抽象的な単位であるといふことを知ることである。この単位を価値単位といつてもよいのである。

(一) 次の諸著参照

Wieser, Fr.: Art. „Geld.“ Handwörterbuch der Staatswissenschaften, 4. Aufl., IV. Bd., S. 687.

Mises, L. v.: Theorie des Geldes und der Umlaufmittel, 1912, S. 29.

Heller: Volkswirtschaftslehre, 1927, S. 106.

b 貨幣と価値単位とは混同の危険あり

貨幣と価値単位とは事實上は相合して一體となつて現はれるが、(Vgl. Amann, H.: Objekt und Grundbegriffe der Volkswirtschaftslehre, 1927, S. 379.) 原理上はこの兩者は別個のものである。それはそれ等兩者がなす職能が異なるのでわかるのである。即ち貨幣本來の職能は交換手段といふ技術的なものであるが、価値単位は全然社會的な範疇である。アドルフ・ヴェーナー(Weber, Ad.: Allgemeine Volkswirtschaftslehre, 1928, S. 349)は實在的交換手段

と觀念的交換手段とを區別し、具體的なもので、吾々が手にとることのできるようなものが實在的で、只それを以つて抽象的に計算を行ひ得るに過ぎないものは觀念的であるといつてゐるが、その區別も結局は貨幣と價值單位との區別と變りはない。扱て又この貨幣と價值單位とはよく混同されるのであるが、それは主にこの兩概念を同一の平面に置いて眺めようとすることに起因してゐるようである。併しそれが又現代の様な高度の資本主義時代に於いては、常に單位を貨幣に具體的させてゐるのであるから無理のない點もある。併し單位は何時如何なる場合にも貨幣の形態をとつて現はれぬばならぬかといふに、必ずしもさうではないのであるから、アドルフ・ツェバアやゴツトルの様うにあまり同じ様な名稱を用ひない方がよ<sup>(1)</sup>。

殊に吾々が諸種の現象を理論的に研究する場合には、どうしてもこの貨幣と價值單位とを區別しなければならぬ。普通貨幣職能論に於いて交換手段とか、支拂手段とか、價值測度とかいふ職能を皆同一平面に於いて見てゐる場合には、何時でもこの大切な區別を看過してゐるのである。

(一) ゴツトルは計數貨幣と支拂貨幣といふ言葉を用ひて價值單位と貨幣記號とに相應する區別をなしてゐる。

Vgl. v. Gottl-Othilienfeld, Fr.: Die wirtschaftliche Dimension, 1923.

### c 名目論者は價值單位をどう名付けてゐるか

貨幣と價值單位との區別を知らないで混同するのはまだしもであるが、之を知りつゝ混同してゐるものがある

それはリイフマンである。彼は貨幣を理念であり、抽象體であり、一般的計算單位であるとなしてゐる。併し更に、貨幣が漸次發達すると貨幣制度は國家の羈絆を脱し、交換取引の要求に應ずるようになる。そしてその取引そのものゝ中からその取引に用ひられる交換手段が創造される云々とゞつてゐる。(Vgl. Lieffmann: Geld und Gold, 1916, S. 97, 191; Nutzen und Kosten, Wert und Preis, in „Schmollers Jahrbuch“, Bd. 49, S. 1005.)。併し之はマンゲンがゞつたように原理を鼓脹しすぎて、價值單位としての貨幣を説くものである。(Vgl. Wagemann: Allgemeine Geldlehre, 1. 1923 S. 52.) かく批評されたに拘らず、リイフマンは尙流通せる貨幣を價值測定者であるとなしてゐる。

又エルスタアは價值單位を抽象的なものと考へたが、併し之を矢張貨幣であるとなしてゐる。(Elsner: Die Seele des Geldes, 1920.)

貨幣と價值單位とを混同してゐるのはリイフマンやエルスタアに限つたことではない。ペンディクセンも亦價值單位即ち共通分母としての貨幣を説いてゐるのである。元來價值單位に關する思想そのものが名目論者に發して來てゐるのであるから、名目論的な貨幣觀は貨幣と價值單位とを混同し易いわけである。コーン(Cohn, F. W.: Kann das Geld abgeschafft werden? 1920, S. 34; Vgl. S. 7, 9, 12/14.)の説はその典型的なものだとゞつて。即ち曰く「貨幣は社會經濟的價值を計算する共通分母(換言すれば價格表示手段)であり、又市場財を與へてそれと交換的に受取る物體的な記號である」と。

併し貨幣と價值單位とが夫々別個の概念内容を有するのならば、それを同一のものだといふことはできない筈である。だからこの兩者の概念内容を精査する必要がある。そして價值單位が貨幣の中へ打込まれたときにのみこの兩者の結合を見ることができるのである。併し他方に於いて又、貨幣は價值單位の支持を受けないでは存立し得ないものだといふことを悟らねばならぬ。

#### d 貨幣存在の前提としての價值單位

扱へすべての貨幣單位は抽象的價值單位が確立してゐなければ存立し得ないものである。換言すれば價值單位の存在は貨幣存在の論理的前提である。シンガー(Singer, Kurt: *Das Geld als Zeichen*, 1920, S.69)が「貨幣概念は價值單位の概念を前提としてゐる、そして斯くの如き價值單位が存立してゐなければ、支拂手段に就いて論ずることもできなす」<sup>1)</sup>と云つてゐるのも此の意味である。又此の外ランリン(Laughlin: *Principles of Money*, 1903, P. 7.)やカッツセル(Cassel, G.: *Theoretische Sozialökonomie*, 1923, S. 314)も同一の結論に到達して居る。又ギッテル(Gottl. Othilienfeld, Fr.: *Die wirtschaftliche Dimension*, 1923, S. 8)は計數貨幣が存在しないで支拂貨幣がその働らきを現はすものとは考へられなす<sup>2)</sup>と云つてゐる。更にヌスマム(Nussbaum: *Das Geld in Theorie und Praxis des deutschen und ausländischen Rechts*, 1925, S. 6)は觀念的單位のことを論じ、次の様に云つてゐる。即ち「此の單位は純論理的に見れば個々の貨幣記號の前にあるものである。それはそれ自身では觀念的なものではあるが、流通場



裡にあつては直接貨幣記號の中へ具體化するものである」と。

### e 抽象的貨幣單位

以上に依つて大體明かになつたように、貨幣は價值單位が豫め存在するのでなければ、之を考へることはできない。併しそれにも拘らず、貨幣は抽象的單位の成立す爲るめの前提條件であるといふ從來の主張は無下に却けてしまふわけにはいかない。ヘラー(Heller, Theoretische Volkswirtschaftslehre, 1927, S. 105.)が云つてゐる様に「計算單位としての職能は、一般的交換手段たるの職能に續いて起るものだ」といふ説は或意味に於いては本當なのである。然らばどういふ場合に此の説が是認せられるかといふに、それは流通せる貨幣單位と一定の購買力といふものとが結び付けられた場合に於いてである。エルスタア(Elster: Die Seele des Geldes, 1920, S. 85.)が次の様に云つてゐるのも結局はこの事實を云ひ現はさうとしてゐるものに他ならない。即ち曰く「我々が價值單位といつてゐるものは、支拂手段を持つてゐるものに、その收得が保證されてゐるところの、財の分量であるといふことである」と。かように購買力といふ考を入れてくると、貨幣が價值單位の出發點となり、従つて貨幣が單位に對して優位性を持つてゐるといふことができるのである。併し此の單位は、先きに述べたところの單に抽象的に定義されるばかりで、貨幣の中へ具體化されることを頼りとしてゐないで、然かも貨幣造出の前提條件となるところの本來の價值單位とは根本的に異つたものである。即ち本來の價值單位は——假令抽象的な單位に過ぎないと

はいへ——一定量の素材と同一なものであるから、それ自身で變化するといふことはないが、流通せる貨幣から誘導された單位は變化することを以つてその特徴としてゐる。例へば「馬克」といふ概念の内容は法律によつて定義されてゐるが（即ち純金一疋から二十ライヒスマアク貨を百三十九個半、又は十ライヒスマアク貨を二七九個作ること）、流通場裡にて不斷に流通し、馬克といふ名前前で云ひ現はされてゐる貨幣が持つてゐるところの購買力は全體で何程といふ様にきまつてゐるものではない。ところで流通場裡に於いては、すべての評價をなすに當り、法律上及び事實上の理由により、どうしてもこの後の單位にたよらねばならぬ、従つて又價值單位は貨幣が遭遇するすべての偶然性の影響を受けるのである。かくして價值單位の本來の意味が變つて來る。そこでこの貨幣から抽象された單位は明かに抽象的なものであるから「抽象的單位」といふことができるが、之はかの本來の意味での、そして變化しないところの價值單位とは別個のものであり、そして個々の具體的な貨幣單位の購買力と同じものだといふことを明瞭にする爲めに、之を「抽象的貨幣單位」と名付けたならば便利かと思ふ。

此の約束を承認しての上であれば、貨幣が單位の出發點をなすといふ假定は全然據り處のないものではない。又この意味に於いてのみ「貨幣に價格の一般的表示者である」(Fetter, Fr. H.: Economic principles, 1926, S. 263.)といふこともいへるのである。

f 價值單位の現象形態と本質

扱て又この流通せる貨幣そのものから抽象した單位を認めなければ、或種の現象を説明することが恐らくできないであらう。即ち價值單位の貨幣代用的現象形態(貨幣が消滅した場合に價值單位が現象界に於いて呈するその態様)の多くのものはこの單位を認めなければ理解ができないのである。又大戦前と大戦後とでは獨逸の貨幣價值は非常な下落をなした、併しその間、法定の價值單位は少しも毀損されてゐない。馬克の定義は一九一三年と一九二三年とで異つてはゐないのである。若し世人が貨幣に先行せる價值單位のみを本當の單位だと認めようとするれば、通貨膨脹によつて著しくその價值を落した單位は一體どんなものであるのか、わけがわからなくなつてしまふ。そこで之は次の様に説明しなければならぬ。即ち通貨膨脹の犠牲となつたのは、本來の價值單位ではなく貨幣から抽象された單位である。即ち貨幣の購買力に對する信頼に動搖を來たすと、直ちに價值單位の貨幣代用的現象形態にその反動が在る様なものである。整備した本位制度に於いて、この區別は一向目立つて見えない。何故かといへば一馬克分の金は、一馬克といふ刻印の押しである、現に流通せる貨幣と同じ文けの交換價值即ち購買力を持つてゐるからである。併しそれでもこの兩種の單位、即ち「抽象的價值單位」と「抽象的貨幣單位」との區別は之を存置しなければならぬ。

以上の如く考へて來ると貨幣が先きか、單位が先きかといふ論争は無駄なものであるかも知れないが、又假令無駄であつてもなくても、價值單位の本質に就いて研究したことについては何等の變化はない。即ち論理的根據から云へば具體的な貨幣より以前に存在せる單位のみが本當の「單位」であるといふことである。以下に於いては

専らこの價值單位について考へようと思ふ。

現代の資本主義的經濟に於いては、貨幣と價值單位との結合、換言すれば單位の具體化といふことが、價值單位の最も普通な現象形態である。價值單位が貨幣單位や本位制度と相結合してゐるのは、貨幣單位と價值單位との間に隙がないからである。現代の文明國にあつてはこの状態が原則であつて、この特徴を價值單位の貨幣的現象形態といふ。

アモンは貨幣品位と價格表示手段單位とは一致するといふが、併しそれは概してさうであつて、必然的にさうだとはいへない。そこで例へば特別の理由でこの兩者が一致しなかつたり、又は價值單位のみあつて、貨幣の存在しない場合がある。だから單位が貨幣に具體化するのには只價值單位の一現象形態に過ぎないのである。その他にもう二つの現象形態が考へられるのだから、合計三つの現象形態がある。即ち價值單位の

貨幣的現象形態 *monetare Erscheinungsform.*

貨幣代用的現象形態 *antimonetare Erscheinungsform.*

先貨幣的現象形態 *Eraemonetare Erscheinungsform.*

の三つがそれである。この分類に對しては、或はこうした歴史的な分類の仕方はいけないではないかといふ人があるかも知れぬ。成程その疑問はそれ自體としては全く正しいのであるが、之に對しては次の様に反駁することができる、即ち「價值單位の問題」全體——理論的にも歴史的にも眺めて——が貨幣現象に關する思想の中にその根

據を置いて居るのであつて、價值單位の多様な形態や抽象的單位の根本特徴といふものは、この貨幣からのみ明かにすることができるからであると。

### 9 價值單位と類似の概念

この價值單位の現象形態が多様であるのは、價值單位の本性から來るのである。この單位は具體的なものではなく、抽象的なものである、換言すれば只頭で考へ得る財の總量である。この總量が具體的に如何程であるかといふことは個々の場合にきまるのである。價值單位の定義に於いて、社會的價值を持つた具體的な對象と何等かの關係を持つてゐることが示されてゐないような價值單位は考へることができない。即ちロードベルトス (Roadbertus, Zur Erkenntniss einer Staatswirtschaftlichen Zustände, 1342, S.173.) の云ひも同様に「單に觀念的な大ぢ」といふものは價值測度たることを得ないものである。又ヴェルケン (Wilken: Die Phenomenologie des Geldwertbewusstseins, Archiv f. Sozialwissenschaft und Sozialpolitik, Bd.56, S. 429.) が「交換價値の事實上の代表者として、或對象の物質的分量の單位が必要なりとしてゐるのは正しい。ところが之に反して抽象的な價值單位が同時に具體的に存在する必要はない。抽象的價值單位の本性は具體的な素材とは離れて獨立にその職能を果たす點に存する。この價值單位と類似の内容を持つた諸概念によつて、何れもこの價值單位の抽象的性質が力説されてゐる。アモンの「價格表示手段單位」にしろ、ヴェルケンの處分權能とか、計算單位とか、價格表示(之等は皆同一

事項を異つた觀點から云ひ現はしたものに過ぎぬ」とかいつてゐるものに就いて見ても同様である。

この單位は數量的に云ひかへる必要がある。そこで數の單位を用ひてもよければ、量の單位を用ひてもよい。又重さの單位、長さの單位、平面の單位でもよい。けれども現代經濟に於いては大低重さの單位が用ひられる。イデー (Eddie, L. D.: *Economics*, 1925, S. 503.) はこのことを次の様に云つてゐる、即ち「之は重さの單位であるがそれが價值を測定する單位として用ひられる。重さの單位が價值單位として役立つのである」。

價值單位を量的にきめただけでは未だ不充分であつて、それと並んで價值單位として役立つ抽象財を性質的にもきめる必要がある。即ち財たる性質を有し、従つて正常な状態に於いては商品となり、代價をうる能力を有するものを出發點とすることが必要である。この點に就いて、テュルゴ (Turgot: *Reflexions sur la formation et distribution des richesses*, 1766, Sec. 32, 40.) が價值測定となり比較の尺度となるものはそれ自身價值の充分あるものでなければならぬといつてゐるのは正しい。又シンガー (Singer: *Das Geld als Zeichen*, S. 74.) は貨幣史上その初期に於いては價值單位が財の價值に基つてゐたことは否定し得ないといひ、ムエーラー (Moeller: *Die Lehre vom Gelde*, S. 155.) も亦貨幣單位が價值性質を有すべきものであるといつてゐる。

價值單位は具體的な財の中に認められる。少くともその發生の當時に於いては單位は物體に根據をもつてゐたのである。換言すれば價值單位は具體的な物體から生じたのである。然るに之に反して單位がその作用を現はすことはあらゆる具體的な條件とは獨立なものである。抽象的單位が貨幣に密着してゐた場合でも、その單位の一

定の社會的職能は既に感知せらるるのである。アモン (Amonn: Objekt und Grundbegriffe usw., S. 20ff, 379) は價格や單位が共に觀念的なものであることを説き、そして單位が貨幣の中へ押込められてゐることや、價值單位と價格單位とが一致することなどを大切だとは考へてゐない。又カッセル (Cassel, G: Theoretische Sozialökonomie, S. 378) によれば、却て價格の計算といふことは、標準財から解放されて獨立の存在を持つた、抽象的な單位による計算なのである。かくして數量的な表現であるところの價格は、當然誰にもよくわかる、交換價值單位を前提してゐるのである。

然らばこの單位がどうして獨立するか、換言すれば、最初その單位と結合してゐた物體の羈絆をどうして脱するかといふ問題に對してテュルギーが巧妙な例を擧げてゐる。即ち或國民が「羊」といふ價值單位を用ひてゐたところ、具體的な一匹の羊が抽象的な羊 (價值單位として用られてゐるもの) 二つとその價值相等しとなされるようになつて、その羊といふ單位の最初の内容を失ふことがあると。かく價值單位は最初その根據としてゐた素材から解放されて、終ひには、その物體は消滅してしまつて、只極めて神秘的な名稱の單位だけが殘存するに至ることもある。(Gothl.: Die Wirtschaftliche Dimension, S. 83) 之等兩極端の間を結ぶ諸種の段階を擧げて一系列となしたり、又價值單位、と流通せる貨幣又は貨幣單位とが定義通りに一致してゐるような場合を考へることはちつとも困難ではない。只それには價值單位の現象形態が多様であることを認めればよいのである。併しその如何なる現象形態に於いても單位が抽象的であるといふ本性には變りはない。又價值單位と貨幣とが密着せる場

合でも、又は物體との關係を失つて單に神秘的な單位となつた場合でも、價值單位は何時でも同じ作用を營んでゐる。

この單位の抽象的性質を認めなければ、單位の統一的な意味は到底理解できない、又それが何の爲に存するのかわからない。價值單位を共通分母とするのは、マルクスの所謂等價方程式を立てる爲である。併し此の場合不變的な客觀的交換價值を持つた財なんかは存しないのであるから、どうしても一の擬制を入れてこななければならぬ。そこで價值單位を選ぶときには、比較的動搖の少ない財を根底とした單位を選ぶようにしなければならぬ。

換言すれば、多くの財と、比較的變化の乏しい價值方程式を作る様な物によつて價值單位を定義するようにするのである。此の種の方程式を作る必要は強ち交換行程にのみ限つたことではないのであつて、價格方程式を作るときに特に之が主要な役割を演ずるのである。又例へば「社會主義的經濟制度」とか「共同經濟」といふ様な場合にはこの抽象的單位の應用範圍はもつと廣いのである。その際價值單位がどういふ任務を果たすかといふに、それは流通手段たる貨幣を排除して仕舞つた場合を想像してみればわかるのである。共產主義による分配組織に於ても或一定の單位はどうしてもなければならぬのである。又生産行程を合理的に遂行し、經濟計劃を樹立するにはこの單位が非常に大切である。

價值單位は社會過程の中にあつてその意味を有する、換言すれば價值單位は明瞭な一致か、暗黙の一致かといふ様な社會的な行爲がなければ生じて來ない。何故こうした一致を見るかといふにそれは客觀的交換



價値の一致を容易にしたいからである。それで價値單位の現象形態といふものはすべてが、狹義の價格にはないか知れぬが、兎に角價格現象に關係がある。

價格を表示することはこの抽象的な價値單位のみがなし得るのである、そしてこの職務を果たす爲めには具體的な形態の有無といふことは一向關係がない。そののみならず具體的な形態をとれば、色々の悪い影響を蒙る懼れがあるから、寧ろ無形的、抽象的の方が遙かに都合がよい。

左記の學者達はこの價値單位の抽象性を大いに強調してゐる。

A. de Foville: *La monnaie*, 1907, S. 10.

Solvay, Ernest: *Gesellschaftlicher Comptabilismus*, Brüssel, 1897, S. 9.

Soden, Fr. J. H. R. v.: *National ökonomie*, Bd. II, S. 300.

以上の如く價値單位の概念を積極的に規定したからといつて、消極的な規定を止めてしまふことはできない。即ちこの價値單位の問題の中へ紛ぎれ込んで來た、いろ／＼の現象と價値單位とはつきり區別せなければならぬ。どうしてそうしたものが紛ぎれ込んで來たかといふに、それは前に述べた貨幣の「價値尺度」たる職能から起つて來てゐるのである。そこで價値單位と貨幣單位とを方法論的に區別することが必要である。いひかへてみればある抽象的單位が用ひられてゐる場合に、それが本來の價値單位を指してゐるものであるか、又は抽象的貨幣單位を指してゐるものであるかを吟味しなければならぬ。併し日常の大抵の評價には抽象的貨幣單位が用ひられて

みて、本来の價值單位は極特殊の場合に用ひられるのみである。例へば資本額や手形交換高などはみな貨幣單位でいひ現はされる。又名目論者が貨幣なりとする振替貨幣などもどちらかといへば抽象的貨幣單位に近いものだ流通場裡にあつては抽象的貨幣單位のみをよく知つてゐるといはれるが、このことに就ては殊に經營經濟の方面に於いて多くの例證が存する。又獨逸の通貨膨脹の際に、流通界に於いて不斷にその内容を變化する抽象的貨幣單位をいかに辛抱強く使用してゐたかといふことは、上述の言を裏書きするものである。

どの著者でも皆一樣に經驗的な事實を概念的に分析しようとはしてゐるが、併しその際この抽象的な單位をいひ表はすに用ひた言葉が皆いづれも同一の意味を持つてゐるとは限らないので、それは一々の著書について吟味しなければならぬ。

現代獨逸の名目論は概念内容をはつきりさせる必要があるといふことを強調してゐるが、併し「價值單位」の概念を色々に用ひたので、抽象的單位の本来の本質を見失つてしまつたのである。(未完)